

【あさがお】 蜜瀬かえで 著

\*\*\*

これはある日の御台場女学校のできごと。

\*\*\*

「初っ！」

「僅……」

「どうしたのっ！　すごく顔色が悪いわ！」

「純とね、さっきまで一緒にご飯を」

「まさか、またあの辛いラーメンっ！」

「……あの子が、また行きたいって」

「初は辛いの手でしょ！　どうしていつもそんな無

茶するの！」

「……だって、」

あの子が、あんなにうれしそうに誘うんですもの。

断れるはず。

……いいえ。

一緒に行かないわけじゃないでしょ？

「だったら、せめて辛くないやつ頼めばいいじゃないっ！」  
服が白いから。赤いの以外にするわ、とか適当に言えば

いいでしょ！

……でも。

「あの子が、一緒のがいいって」

……ね？

わかるでしょ？

「……っ！」

「僅っ！　どこへいくつもり！」

「もちろん、純のそこ！」

辛いだけじゃない。

純は、いつもいつも初にばかりつらい想いばかりさせて。

「僅が文句言ってくる！」

「……待ちなさい」

冷えた声と手が、権を引き留めた。

「初、手を」

「だめ」

……知ってるでしょ？

私が、それを隠してるって。

「でも……」

だって、それじゃあ……ずっと初ばっかり……。

「わかって」

私は、私の好きでやってることだから。

これは私の自己満足。

だから、大丈夫よ。

ね？

「……。初がそこまで言うなら」

……今は、わかったわ。

だけど、『今』だけだから。

その代わり、

「権にできることがあったら、いつでも助けてあげるわ」

権にできることだったら、なんだって言っていいいわよ。

初のお願いだったら、権はなんでもきいてあげる！

「……『なんでも』？」

「うん。なんでも！」

「本当に？」

「……ほ、ほんとう、よ」

でも、

……初、どうしたの？

どうして、権のCHARM、見てるの？

……初？

「貴女のそれ」

初が指さしたのは、やっぱり権のCHARM。

新しく作ってもらったユニーク機だ。

「あ、うん。さっきまで練習してたのよ」

第3世代先行試作機、グラシーザ。

複雑な変形、合体機構がついてる、実戦だとまだ、僅く

らしいか扱えないような難しいCHARMだ。

それでもまだ、この子の性能を完全に引き出せたとは思

っていない。

手先の器用さには自信があったけど、この子の扱いには

まだ全然足りてない。

だから、さっきまでずっと自主練をしていたのだけど。

「それを持って、着いてきて」

「……初？」

「『なんでも』言うこときいてくれるんでしょ？」

「あ、うん！　もちろん」

「それなら、」

ね。 僅？

……賢い貴女なら、もうわかってるでしょ？

私のお願いが「なに」か、なんて。

その言葉と、初の冷めたような目に。

僅は自分の喉が鳴ったのを自覚した。

\*\*\*

僅が初に連れられてやって来たのは御台場にある砂浜だった。

ちょうどさつきまで僅が自主練していた場所だ。

足下をとられやすい砂浜は、激しい動きをとると、バランスが大変な分、手元のCHARAM捌きだけでじやなく

て、全身の動きに集中しないといけない。

格好の練習場所だった。

遠くに橋を臨める開けた空の下。

ここはまだガーデンの敷地内だけれど、もう午後の授業は始まっているから、周りに人の気配もない。

そこで、

「……初、なんでこんなことするの？」

「……」

僅が訊ねても初は何も応えない。

僅が「なんでも言うこときく」って言ったときから変わらない、冷めたい眼差しのまま。

その手に持っているのはさつきまで僅が持ってた僅のCHARAMだった。

グラシーザの変形機構のひとつ、マギを使ったワイヤ

「っ！」

「……」

いまCHARMの本体を手にとってマギを供給しているのは、持ち主である僅自身。

だけど、そのワイヤーのリールを手繰って、初は、僅を縛り上げていた。

つまり、慥はいま、自分で起動しているCHARMで、初に自分自身を縛らせている。

もちろん、慥から頼んだことじゃない。

初が、したいって言ったの。

「お願いよ」って。

だからそれを、受け入れた。

初の頼みなら『なんでもする』って、言ったから。

でも、こんなのは変、だと思う。

そう思うけど、言っても初は何も応えてくれないの。

……いつもみたいに。

「初、痛い」

「……」

返事の代わりに、無感情だった初の頬に紅がさした。口角が上がって、結ばれてた口元がゆるんだ。

そして、これ以上つく縛ると痣になつて残るくらいのギリギリのところで、初は手を止めてくれた。

そして、

「慥」

わかってるわね。

勝手に停止したら、ダメよ。

冷めた口調。冷めた目つき。

だけど、頬と口元には恍惚の表情が浮かんでる。

普段の優しい初じゃない。

だけど、これも『いつもの初』だ。

「初……」

自分が初にされていること、受け入れてしまっていることは、絶対、変なことだ。

わかってる。

……でも、なんでもするって言ったの。

……。わかってて、言ったのよ。

だから、やってるの。

……。だけ……。

「初……」

自分でもわかるくらい、泣きそうな声が出る。

だって、こんなの変なもの。

絶対に、おかしいの。

誰かに見られたらって思ったら、それだけで怖い。

そんな慥の声と表情に、初は悦びの表情を浮かべている。

喜んでいる。

初は、喜んでいる。

だから、ね。

「慥はっ」

初を、初のこと、

「信じてるから」

ね？

慥自身、全然説得力のないか細い言葉だと思った。  
でも、ほんとうのことよ。

慥は、初のことを信じてるから。

「慥は、いつでも初の味方よ」

だから、もう、これくらいで、

「やめよ」

慥、初のお願いきいたわよ。

初も喜んだでしょ？

顔を見たらわかるわ。

だから。

初の口元がまたつり上がった。

そうして、初がやつと発した言葉は、

「まだよ」

慥の望むものではなかった。

ぞくり慥の背筋を悪寒が走った。

まだ、続きがあるのだ。

「……そうね。どうしようかしら」

言いながら初が取り出したのは携帯端末。

それをその綺麗な指で操作しながら、

「純が、」

「っ！」

慥のこんな姿見たら、どう思うでしょうね？

そ、そんなの、そんなの、

「〜♪」

うれしそうな初が携帯端末を慥に向け、

カシャ

シャッター音。

（……え、いま、撮ったの？）

……初？

「初っ！？」

「……だめよ」

まだ、動いちや。

そう言いながら、初はまだ携帯端末に指を滑らせる。

そうしながら、

「もし、」

そう、もし。

私が今ちよつとだけ操作を間違えて。

ガーデンの連絡網にいまの写真、送ってしまったたりした

ら？

慥の身体にざわつきが走る。

い、イヤ。

そんなこと、されたら……。

カシヤ

再びシャッター音。

また、撮られた。

「慥は、初のこと」

信じてる。

そんなこと、初はしないって。

こんなのは、ただの遊びだって。

初が楽しい遊びだって。

わかってる。

だけど、

「……初」

カシヤ

カシヤ

カシヤ

そんな慥の写真を初は何枚も撮っていく。

何枚も、何枚も。

うれしそうに、楽しそうに。

目は全然笑ってないけど。

冷たいままだけど。

初は、いま、喜んでる。

慥が、痛くなってるのを。

怖がってるのを。

初は、喜んでくれてる。

こんなの変だけど、これが『いつもの初』だ。

慥が知ってる、もうひとりの初だ。

慥に優しくはしてくれないけど、慥を見てくれている初。

純じゃなくて、慥を見てくれてる。

慥を見ててくれてる。

だから、言われるままにするの。

おかしい、でしょ？

でも、言われるがままにポーズもとる。

恥ずかしかったけど、ピースとかもした。

気持ちはずんぜんピースとかじゃないわ。

泣きそうだったのよ。

でも、慥はこんなことじゃ泣かないの。

大好きな初が喜んでるから、耐えてるの。

泣きそうだけど、耐えてるの。

怖いけど、耐えてるの。

「ねえ、慥」

「っ」

顔を寄せ、初の声が、耳元でささやいた。

「もしこんな写真、誰かが見たら」

そう、例えば、いつも貴女が叱りつけてる下級生たち。

あの子たちが見たら、どう思うんでしょうね？

「権は、初のこと信じて、」

「そればかりね」

……でも、

カシャ

「いまのは、とてもいい表情だったわ」

そうやって初は端末の画面を権に見せてきた。

（……え？）

そこに写ってるのは権だった。

いま撮られたばかりの権の写真。

泣きそうで、怖がつてる、権。

でも、

「貴女、こんないい顔してるのよ？」

知ってた？

……うそだ。

うそだ。

うそだうそだうそだ！

権は、いま泣きそうなのよ。

怖いよ。

我慢して耐えてるのよ。

なのに、どうして。

どうして、権は、そんな顔してるの？

どうしてそんなにうれしそう、なの？

初じゃなくて、権が。

どうして、そんな顔……。

カシャ

「ほら、また撮れた」

初がまた見せてくる。

どうしてだろう。

さつきよりも、もっと喜んでるみたいに見える。

喜んでる権がいるわ。

「これだけじゃないのよ」

ほら、と。

目の前で、さつきまで撮ってた写真を初が指先でめくつ

ていく。

どの権も、泣いてない。

どの権も、怖がつてない。

どの権も、耐えてない。

どの慥も、よろこんでる。

うれしそうに、よろこんでる。

うれしそうに、ピースしてる。

「そう、その表情」

カシヤ

初がまた写真を撮った。

そこにもたぶん写ってる。

さつきよりもっとうれしそうな慥が。

強ばってたはずの口元は笑みを作っていて。

背筋を這っていたはずの恐怖は、快感になって浮かんでる。

「〜♪」

初は喜んでる。

そして、慥も。

いまの状況を喜んでる。

いまの状況を楽しんでる。

慥は、慥は、

「慥ってやっぱり、」

耳元で初がささやく。

「ヘンタイ、ね？」

そんな放心状態の慥に向けた初の声は、いつの間にか

普段の初に戻ってて。

のぞき込んでくる瞳にもあったかさが戻っていた。

いまは慥だけが、恍惚の顔のまま。

ただ、海辺に座っているの。

それを初は、優しい眼差しで見つめてくれている。

慥の大好きな、初の優しい眼差しに戻っているの。

だからね。慥は、いま。

とってもね。

うれしいのよ。

\*\*\*

どのくらいの間、そうしていただろう。

気づいたら、日は傾きだしていた。

そして、そんな慥をのぞき込んでいる顔。

「……初？」

「残念ながら、純様よ」



姉様じゃなくて、悪かったわね。

(……え?)

……え?

段々と思考が返ってくる。

冷静さが、戻ってくる。

頭が、急に冷えてくる。

なんでっ!

純、なんで、ここにっ!?

もしかして……初、ほんとに……?

……見られた、の?

純に、こんな、僅の、こんなっ!

「何言ってるのか、よくわかりませんけど」

姉様だったら、さつき出かけましたわよ?

鎌倉まで甘蜜食べに行くって。

遠出の気分じゃなかったから、わたくしは遠慮しましたけど。

そういうふうは何食わぬ顔で。

いまの僅を見ても何も思っていないような口調で、

「貴女もまた、ほんとバカなことして」

……バカ。

うん。

わかってる。

こんな……

「こんな足場の悪いところで使いなれてないCHARMの練習なんて十年早いですわよ」

そう言うてから。

そこで、一度考えるようにして、

「貴女も『わたくしの』レギオンの一員なのだから」  
十年はかかりすぎですわよね。

「三日は早いわ」

そう、ふふん、と鼻を鳴らす純に、僅は、

……え?

話が、状況が、噛み合って……ない?

CHARMの、練習?

確かに、午前中はここですつとしてた。

けど、さつきまで、僅は……。

「まったく、わたくしが偶然通りかかったからいいものを」  
そんなぐるぐる巻きの格好悪い姿でベソかいてるところなんて、『わたくしの』ロネスネスの自覚、あるのかしら?

「……ベソ、かいて?」

ぼんやり復唱するように僅がつぶやいた言葉に、純はいつもの「はあ?」とひとを小馬鹿にするような表情で、

「気づいてませんでしたの？」

あんな泣きそうな顔までしてて。

純はそうあきれたような口調で。

だけど、だって権はさっきまで……。

「……まったく」

そう言いながら、純は権の身体を絞めあげているワイヤーに手を伸ばす。

「何これ。どうやったら、こんなバカなことになるんですの？」

「痛っ」

「ガマンしなさい」

自業自得ですわ。

面倒そうにワイヤーをグイグイ引っ張る。

一応、解こうとしてくれてるみたい、だったけれど途中で、

「……面倒くさいですわね」

そう言っつて、常に対当しているCHARM、ヨートウンシュベルトを抜き放ち、そのまま、

「——っ！」

一閃。

一太刀で権の身体に巻き付いたワイヤーを断ち切った。

そのまま軽くフリップして、納刀。

しっつ、

「……よく考えたら、それ、貴女のマジでできてるんだから、普通に停止したらよかっただけじゃありませんの？」

……ああ。安全装置かかってましたのね。

ほんと、何してるんだか。

純の口調は依然、呆れたまま。

それは決して、権を蔑むようなものではなくて。

権が想像してたのと全然違っつて。

もつと……軽蔑されるかと、思っつた。

\*\*\*

チカラが入らずへたりこんでしまった権は結局、純の背におぶさつて寮までの道に行くことになった。

単なるマジ切れ。保健室行くまでもないでしょう。

そう言っつて背を差し出してきた純。

正直、嫌だったわ。

見られたくない姿を見られたというのもあるけれど、  
はそもそも純のことが嫌い。

ワガママで、自分勝手に、いつも周りを振り回して。

その後始末はいつだって初と純の仕事だった。

今日だって。さっきのだって。

……けど、いまは大人しくその背中を借りてる。

ほんとに、嫌だったけど。

「……純」

「ん？」

「……なんで？」

「はあ？」

なんでもなにも、

「あんなところで、泣き顔のくせして、強がって耐えて、苦しんでる子がいたら、助けないほうがおかしいでしょう？」

さっきよりもひどい言いよう。

だけど、

泣き顔？

耐えて？

苦しんで？

それは、最初に純が思ってたこと。

初に自身の写真を見せられるまで、思いこんでたことよ。

でも、本当は違ってた……。

「ほんと今日はやけに大人しいですわね」

こっちまで調子が狂いますわ。

そう言って嘆息すると、

「いつも言ってるでしょう」

『わたくしは絶対に仲間は見捨てたりなんてしない』

何があるうとも。

例え、死を覚悟しても。

こんな場面という言葉じゃありませんわ。

全然カッコもつきませんわ。

純の目の前には純の背中と頭しか見えない。

どんな顔してるのかわからないけど。

いつもの純だろう。

純は、いつだって純だもの。

嫌だけど。嫌いだけど。

そこは、どうしたって純も認めている。

純は嫌なやつだけど。

悪いやつじゃない。

……嫌いだけど。

「ですから、困ったことがあったら、いつでもこの純様に

相談なさい」

仮にも貴女は、『わたくしの』レギオンのメンバーなのだから。

……さつきから、『わたくしの』を強調してくるのは、権が純をレギオンの将として認めてないのを知っているから。

……ほんと、こういうとこよ。

「それにしても」

「？」

「貴女も大変ですわね」

姉様の相手とか、ほんとよくつき合いますわね？

……。くっく！？

「純っ、お前、やつぱり！？」

一瞬で顔が紅くなった。

「はいはい。お子さまはお子さまらしく、大人しく純様におぶさってましょーねー？」

そうじゃないと、ヤケドくらいじゃすみませんわよ？

チカラの入らない身体でたばたしても、軽くないなされてしまう。

「純っ！ 純っ！」

「はい。純様ですよー」

どんな子だって、仲間は絶対に見捨てたりなんてしない。

コイツのこういうところ、ほんとうに……っ！

「権はやつぱり、純が嫌いよ！」

「奇遇ね。わたくしもよ」

\*\*\*

ある日のお台場女学校での出来事。